現代資本主義分析とカール・マルクス

長　島　誠　一

目　次

まえがき
第1節　マルクス vs. ケインズ vs. シュンペーター——サムエルソン教授の基調報告——
第2節　シュンペーターの資本主義解体論
第3節　現代資本主義の危機の深化
第4節　マルクスと玄孫たちの対話——エピローグにかえて——

まえがき

カール・マルクス (Karl Heinrich Marx, 1818～1883) は，いまから100年前に，波瀾に満ちた愛と科学と革命の生涯にピリオッドを打った。安楽椅子に腰かけたまま眠るように息をひきとったという。3月17日，15カ月前に先立った愛妻イェニーの眠るハイゲート墓地の同じ墓に葬られるにあたって，戦友フリードリッヒ・エンゲルス (Friedrich Engels, 1820～1895) は，おおよそ次のようにマルクスの業績について演説した。

3月14日，午後2時45分，現代最大の思想家は考えることをやめました。……ダーウィンが生物界の発展法則を発見したように，マルクスは人間の歴史の発展法則を発見しました。……それだけではありません。マルクスは，今日の資本主義的生産様式と，それが生みだしたブルジョア社会との特殊な運動法則をも発見しました。剰余価値の発見とともに，この分野に突然光りがともされました。……マルクスにとっては，科学は歴史の動力，革命的な力でした[1]。

経済理論学会は，3月12日（西南部会）と14日（関東部会，関西部会）にマル

1)　『マルクス・エンゲルス全集』19巻，大月書店，331—332頁。

クス没後100周年を記念すべく学術集会や講演会を開催し，10月1・2日の全国大会ではマルクスの経済学の諸分野の検討と『資本論』の現代的意義について討議された。とくに全国大会のシンポジウムでは，エンゲルスがマルクスの業績として総括した諸点，すなわち，(1) 唯物史観，(2)『資本論』の現代における有効性，(3) 革命（変革）の展望について論じられた[2)]。

報告・討議の方向は，マルクスの命題から出発し，それと現代とを対比するものだった。本稿では，あえて冒険して，現代の資本主義から出発して，マルクスに回帰する方向をとってみる。

第1節　マルクス vs. ケインズ vs. シュンペーター
——サムエルソン教授の基調報告——

マルクスの死んだ1883年に，きしくもケインズ（John Maynard Keynes, 1883～1946）とシュンペーター（Joseph Alois Schumpeter, 1883～1950）が生まれた。この3巨頭を比較することは，資本主義世界と社会主義世界とが共存し対抗しあう現代の世界を分析し，その動向を予測するにあたっての重要な示唆を与えてくれるだろう。彼らの資本主義観や社会主義観は鋭く対立している。しかもマルクスは100年前になくなり，その後に生じた資本主義の変化と社会主義の生誕を知らなかっただけに，3人を同じ次元で比較する方法には問題がある。すなわち，マルクスと現代とを結びつけるためには，段階的媒介の論理が必要であり，現存する社会主義に対するマルクスの見解を私たちは知ることができないからである。しかし，マルクスをケインズやシュンペーターと同時代人であるかのように比較し評価する論稿が今年の論壇に輩出したという事実は，それだけマルクスの思想体系が現代の世界に強い影響を及ぼしていることの何よりの証拠であろう。本稿は，現代の資本主義から出発してマルクスに回帰する方向をとるので，はじめに，現代の資本主義（混合経済論）の支持者であるサムエルソン教授（Paul A. Samuelson）のマル

2）その内容については，1984年に発行予定の『経済理論学会年報第21集』を参照されたし。

クス vs. ケインズ vs. シュンペーター比較論の紹介と批判からはじめよう。

1980年8月4日，都留会長下で開催された国際経済学協会（I.E.A）第6回世界会議（メキシコ市）において，サムエルソン教授は「20世紀末の世界経済」と題して基調報告した[1]。教授の報告は，現代の資本主義（混合経済）はスタグフレーション病に陥ってるが，その克服の危険な方向としてファシズムが考えられる。しかしファシズムは，民主主義の放棄というヨリ大きな代償を払うことを意味する。分配闘争によって社会的分配物（パイ）を減少させないようにしなければならぬ，と教授は結論づけた。こうした現代資本主義観（混合経済論）と私の見解との違いは，第3節でおのずと明らかになるであろうから，ここではサムエルソン教授のマルクス vs. ケインズ vs. シュンペーター観を検討しておこう。結論から先きに言えば，マルクスへの破産宣告，シュンペーター再評価，ケインズ擁護である。教授のマルクス批判は，(1)マルクスの論定した資本主義体制の運動法則は実現しなかった，(2)労働分配率は，マルクスの剰余価値や資本の有機的構成の命題から演繹されるようには推移してこなかった，(3)今日，19世紀流の自由放任体制下で生きてる人間は一人もいないのであり，マルクスは政治経済学者としてよりも社会科学者として優れている，とするものだった[2]。マルクスの傾向法則（予測が当然入る）は実現せず，マルクスは過去の経済学者として評価される。過去100年以上の間に資本主義が大きく変化したのであるから，マルクスの定式化した諸傾向法則がそのまま実現しなかったからといってマルクスその人の理論が誤まっていたということにはならない。したがって，『資本論』の意義がそれで否定されることにもならない。また，労働分配率の歴史的推移について語ろうとするなら，この間の労働者階級の闘争の成果や国家の社会政策の影響を考慮しなければならないはずである。教授のマルクス評価は，『資本論』体系の理論的前提を無視した，経験主義の見地からの粗雑な批判にすぎない。『資本論』で展開された諸法則の理論的かつ歴史的検討を行うことは本稿の

1) Paul A. Samuelson, *The World Economy at Century's End*, Comité Organizador Local—Colegio Nacional de Economistas, A.C., 1980.

2) *ibid.*, p. 2

直接の課題ではないので，このくらいにして先きに論を進めよう。教授の展開したシュンペーター再評価論とケインズ擁護論を紹介し批判することによって，教授が無視したがるマルクスの意義を反証してゆこう。

サムエルソン教授は，ケインズとの対抗においてシュンペーターを再評価する。すなわち，1960年代のケネディー政権下ではケインズは全盛期にあったが，1970年代を悲観的になまなましく想い起こしてみると，資本主義の未来に対するシュンペーターの暗い予言が適切性を帯びてくる，と。シュンペーターの予言はすでに40年ほど前に『資本主義・社会主義・民主主義』において完成されたが，それ以前にシュンペーターの見解は固まっていた。新左翼学生のヴェトナム反戦運動がアメリカの学園で爆発したとき，教授は，1929年のハーバード大学でのシュンペーターと若きスウィージー (Paul M. Sweezy) との論争を生ま生ましく想い出した。その論争でシュンペーターは，資本主義はノイローゼのような精神的苦痛によって死んでゆく，と予言していた，と証言する[3]。そして，シュンペーターの公理を次のように要約する。

シュンペーター公理 1

経済制度それ自身は本質的に安定的である。ワルラス流の一般均衡はつねに解決方法をもち，もし政治制度と社会学上の制度が経済法則の作用を阻害しなければ，その解決方法は実現できるだろう。

シュンペーター公理 2

資本主義制度は経済的には安定しているが，その本質において政治的には不安定である[4]。

こうしたシュンペーターの経済と政治との二分割体系は，マルクスの下部・上部構造論とは明らかに異なっている。マルクスは，経済過程そのもの，すなわち資本の蓄積過程は，不均衡の累積過程とその暴力的な均衡化過程とが繰り返えされる過程（産業循環）とみなした。ワルラス流の一般均衡の世界は，産業循環（景気循環）運動によって事後的に成立する世界にすぎなかった。マルクスは資本主義経済を本質的に不安定な体制とみており，マルクス

3) *ibid.*, p. 5, pp. 10—15.
4) *ibid.*, p. 7, p. 10

の時代にほぼ10年前後で周期的に恐慌が勃発していたことによって，マルクスの見解は正しかった。今日でも，形態は変ってきているけれども世界的に恐慌なり不況が長期化して起こっていることを否定する人はいないだろう。恐慌という代償（失業，倒産，人的・物的浪費）を払ってしか均衡を維持できない経済体制は，本質的に不安定な体制といわざるをえない。もちろんシュンペーターにはイノベーション論を基軸とした景気循環論があるけれども，それは理論的には壮大なるゼロに近いものとみなしえるし[5]，公理1の一般均衡の世界との関連がつけられていない。経済と政治との分断があったように，ここでも静学体系と動学体系との分断が起こっている。

現代の資本主義の分析にとって興味あるのは，公理2である。そこで，サムエルソン教授のシュンペーター評価を追跡してゆこう。シュンペーター再評価のエッセンスは次のようになる。

> 物質的進歩の成果たる財の分配における市場資本主義の成功そのものが資本主義の破滅に導く，とシュンペーターは宣言した。生産性上昇に寄与する資本主義の合理性は，不合理な感情たる社会的統合性（cohesiveness）を蝕んでゆくだろう。富裕に甘えているだだっ子たちは両親を否定し財産を相続しないだろう。彼らの自己嫌悪は倦怠と混乱（anomie）を生むだろう。……『資本主義・社会主義・民主主義』が生誕40才になろうとする今日，その分析中の最良のものは，資本主義の成功そのものがその破滅となるだろうとのシュンペーターの驚くべき命題である[6]。

シュンペーターの描く経済の世界では合理性が支配し，政治の世界では不合理性が支配する。それゆえに，資本主義制度は経済的には安定しているが政治的には不安定である（公理2）。資本主義は，経済的には富裕を生みだすことに成功するが，物質的豊かさは精神的貧困を生みだし，精神病化した資本家の次世代は活力を喪失し，資本主義制度を相続しなくなる。以上が，サムエルソン教授が要約するところのシュンペーターの公理2である。『資本

5）シュンペーターの全体像については，たとえば，篠原三代平「シュムペーターと現代世界」『エコノミスト』1983年4月19日号，参照。

6）Paul A. Samuelson, *op. cit.*, p. 10

主義・社会主義・民主主義』で展開されている資本主義解体論（第二部）は，もっと多様な側面が論じられているし，これについては次節で検討するが，教授の要約はシュンペーターの基本的ロジックを示している。そして教授は，1960年代後半の学生の反乱と，1970年代のスタグフレーションと，その有力な原因の一つとみなされている労働意欲と労働規律の低下，を目撃した今日，シュンペーターが予言した資本主義の機能障害が20世紀の最後の四半期に起こる可能性を否定できない，という[7]。この点に，サムエルソン教授のシュンペーター再評価の根拠がある。私にもシュンペーターの40年前の予言が現実化してきたように見えるし，教授のシュンペーター再評価は正しいと思う。しかし，こうした精神的退廃現象をまっさきに注目したのはマルクスにほかならなかった。欧米におけるマルクス・ルネッサンスにおいて初期マルクスの疎外論が注目されてきたのも，こうした現代の資本主義のもたらしている精神的貧困なり精神的不安定状態が深刻化してきたからにほかならない。初期マルクスの疎外論は，『資本論』においては，物象化論・物神性論・窮乏化法則としてまとまっていった，といえる。サムエルソン教授にはマルクスの真髄がみえないか，故意に無視してしまっているかにすぎない点を指摘しておこう。

ケインズは，1930年のエッセー「我らの孫たちの経済的可能性」においてすでに，現代の資本主義（混合経済）の20世紀第3四半期（1950・60年代）における成功を予言していた，という。ガルブレイス（John Kenneth Galbraith）より30年前に経済上の不足の問題の消滅について語り，生物社会学者のウィルソン（Edward O. Wilson）より40年も前に生存のためのダーウィン的闘争に人類が巻きこまれてしまってきたことを警告した。そして，物質的豊かさが達成された後で，孫たちの肉体と精神の退廃について心配した，という[8]。マルクスにとっての理想社会が無階級社会であるように，ケインズにとってはスウェーデン型福祉社会が理想である，とサムエルソン教授は判断している[9]

7) *ibid.*, p. 22
8) *ibid.*, p. 4
9) *ibid.*, p. 5

教授は，20世紀の第3四半期の高雇用の維持と持続的スランプの回避こそ，混合経済の輝かしい成果であると自画自賛する[10]。しかし，その後の混合経済は，周知のごとく，低成長・高失業とインフレーションが共存するスタグフレーションに落ち込んでしまった。教授は，スタグフレーションが混合経済に固有の病気であることを卒直に告白する[11]。そして，20世紀末は低成長期になると予想し，その原因を，(1)石油価格の高騰，(2)労働意欲の低下，(3)技術革新の停滞，に求めている[12]。しかし，何故に混合経済が失敗するようになったかについての内在的説明を教授から聞くことはできない。混合経済の成功の讃美とその失敗の告白との対極的な提示に終ってしまっている。それにもかかわらずサムエルソン教授は，混合経済とケインズを弁護する。最初に紹介したように，スタグフレーションはファシズムよりはまだましだし，なによりも民主主義を放棄してはならぬと考え，分配のパイを小さくしないよう労使の協調を訴える。いまや教授は予言者となる。

個人的には，民主主義はとても良い制度ではないが，それよりも良い制度はないと言ったウィンストン・チャーチルに同意しなければならない。混合経済をもっとうまく機能させるのが私の夢だ。……市場機構の能率を維持しながら混合経済の人間味あふれた特質を保持し促進することはユートピアだろうか[13]。

サムエルソン教授のユートピアが実現するだろうか。市場経済（商品経済）と人間性の全面的開花とが両立するだろうか。それとも，シュンペーターが予言したように人間性の衰退・退廃が生じ，現代の資本主義の機能障害がもっと深刻化するのだろうか。事態は，シュンペーターを復活させるかもしれない。さらに，教授は，スタグフレーション克服の可能性（危険性）をファシズムに求めているが，ある意味では，スタグフレーションに我慢せよというに等しい態度といえよう。シュンペーターの社会主義，マルクスの社会主義が否定されてしまっている。リベラル派サムエルソン教授の限界といえよう。

10) *ibid.*, p. 16
11) *ibid.*, pp. 27—29
12) *ibid.*, pp. 30—32
13) *ibid.*, p. 35

第2節　シュンペーターの資本主義解体論

サムエルソン教授が再評価したシュンペーターの予言は，『資本主義・社会主義・民主主義』の第二部「資本主義は生き延び得るか」において展開されている。マルクスの学説については第一部で詳細に検討されているが，マルクス学説それ自体の理論的・歴史的検証は本稿の課題ではないので，シュンペーターのマルクス批判には誤解があるし，マルクス以後のマルクス主義者たちの見解とマルクス自身の見解とが区別されていない点だけを指摘しておく。現代資本主義分析からマルクスに回帰しようとする本稿の狙いからみると，シュンペーターが展開した資本主義解体論は検討に値する。シュンペーターは，マルクスとは違った立場と方法から出発しながらも，マルクスと同じく資本主義は崩壊する，と同じ結論に到達する。マルクスの立場は冒頭で引用したエンゲルスの弔辞にもあるように，「科学は歴史の動力，革命的力」であり，プロレタリアート解放運動への協力こそマルクスの真の目的であった。シュンペーターは，あくまで認識領域にとどまる社会科学者であった。次の文章はシュンペーターの立場を如実に表現している。

> 故に私の議論の運び方がいかに異っていようとも，最終的結論においては私も大抵の社会主義的著者，就中すべてのマルクス主義者のそれと異ってはいないのであるけれどもこの結論を受け容れるためには，何も社会主義者たることを要しない。或る予見をなすことは，決して予言した出来事の進行を願っていることを意味するものではない。或る医者が自分の患者はもうすぐ死ぬだろうと予言したとしても，それは何も医者がそうなるのを願っていることを意味しない[1]。

また，マルクスの方法は，下部構造としての経済と上部構造としての政治の弁証法的関連づけにその特徴がある。そして，経済過程そのものは本質的に不安定であるとみる。シュンペーターにおいては，サムエルソン教授が要

1)　ジョセフ・シュンペーター著，中山伊知郎・東畑精一共訳『資本主義・社会主義・民主主義(上)』東洋経済新報社，1951年，110頁

約したように，公理1（経済）と公理2（政治）とが分離していて，経済過程は安定しているが，政治が本質的に不安定であるがゆえに，資本主義は崩壊すると考える。すなわち，資本主義は，経済的には，長期停滞論が説くように発展の動力を失なってゆくのではなく，創造的破壊（イノベーション）によって生産力を高めてきたし，独占は生産量極大に最も有利な形態であり，経済進歩の推進者である。それゆえに，資本主義は経済的には成功する。しかし成功するがゆえに，(1)発展の推進力たる企業者機能を無用化し，(2)擁護階層を追放し，(3)私有財産制と契約の自由という資本主義社会の制度的枠組を破壊し，(4)敵対的気運が生じ，資本主義を攻撃する知識人階級を生みだし，(5)その結果，企業者自身が資本主義を死守する情熱を失ない，支持者を失なった体制はやがて別の体制に移行してゆく。このようにシュンペーターは，政治的・社会的側面の不安定性から資本主義の崩壊を予言する。ここでは，マルクスとシュンペーターとの方法態度の差異を確認しておくにとどめ，シュンペーターの解体論を検討してゆこう。以上に要約した(1)～(3)は第12章「崩れ落ちる城壁」，(4)が第13章「増大する敵対」，(5)が第14章「解体」において展開されている。この順序に沿って検討してゆこう。

1．企業者機能の無用化

企業者機能とは，シュンペーターによれば，発明を利用して生産方法を革新することである。こうした革新を卒先的に利用する冒険心は日常的に存在しないし，また革新の利用に資金が簡単には融通されないし，その生産物がすぐに買われるわけでもない。そのために，革新の利用は信念と冒険心を備えた極く少数の人々によって実行されてきた。ところが資本主義の発展とともに，革新そのものが日常業務化し一群の専門家の仕事になる一方，消費者も新商品を抵抗なく受容するように変化してきた。その結果，信念と冒険心を兼備した天才の役割は消滅し，革新は組織（官庁，委員会）によって自動的に遂行されるようになる。かくして企業者機能が無用化するが，それは全ブルジョア階層の地位を弱体化させる，とシュンペーターは考える。ブルジョア階級は絶えず優秀な企業者を吸収し機能させるし，そこから自からの生活

の資たる収益を取得する。このように，ブルジョア階級は企業者と生死を共にしているがゆえに，企業者機能の衰退はブルジョア階級の地位を弱体化させる。すなわち，

完全に官庁化した巨大な産業単位は，中・小規模企業を逐い出し，その所有者を「収奪」するのみならず，遂には企業者自体をも逐い出し，階級としてのブルジョアジーをも収奪するに至る。そしてその過程においてブルジョア階級は，自己の所得を失うのみならず，それこそ最も重要なことであるが，その機能をも失うのを如何ともなし難い[2)]。

こうしたシュンペーター説の問題は以下のようになる。第1に，企業者とブルジョア階級との関連である。冒険心と信念を兼備した個人としての企業者の果す機能が無用化してきたことは事実であるが，組織化された革新の自動化を支配しているものは依然としてブルジョア階級なのではないのか。この点は，マルクス経済学において所有と決定の問題として論争されている一つの重要なテーマである（いわゆる法人資本主義論）。第2に，巨大な産業独占が中小企業を駆逐するとの予想はマルクスにもあるが，中小企業を根強く残存させてきた分散化傾向を無視することは正しくない。中小企業を温存させ収奪するメリットが巨大独占のほうにもあると考えなければならない。

2. 擁護階層の追放

資本主義はその発展の束縛や障害となる封建制度（荘園・村落・職人ギルド）を打破し除去した。シュンペーターは，こうした封建制度は資本主義の邪魔物であるばかりでなく擁護物でもあった，という。すなわち，資本主義社会は，経済を支配するブルジョア階級と政治を支配する封建的要素（君主，貴族，僧侶，官僚）との積極的な共生・共存によって構成されている。ブルジョアジー階級は元帳と原価計算にもとずく合理主義者ではあるが，非英雄的である。それとは反対に，貴族や騎士といった封建的要素は人を支配し従属させる神秘的な能力や習慣を身につけている。彼らは，抵抗なしに，官僚や政

2) 同上書，236頁

治家や軍人になっていった。ブルジョアジーは，政治的に無力であり，彼らに国家の統治機能を分担させることによって政治的な防衛や攻撃に成功した。ところが資本主義の発展過程は，政治的保護者である君主を排除してしまった。そればかりでなく，ブルジョア階級という城を政治的に守っていた職人や農民を追放してしまった。かくして，

資本主義は，前資本主義社会の骨組を破壊する際に，自己の進歩を阻止する障害物を打ち壊したのみならず，更にその崩壊を防いでいる支壁をも破壊してしまった。その仮借なき必然性によって印象的なこの過程は，単に制度的に枯死した森を取り除いたのみならず，それとの共棲が資本主義的図式の本質的要素たりし資本家階層の同伴者をも一掃してしまった[3]。

シュンペーターは，一方では封建的要素（貴族や騎士）が近代的な官僚・政治家・軍人に転化したといいながら，ブルジョアを保護する君主を排除したことをもって最大の擁護者を失なったとする。しかし，国家の統治機能の逐行が，専制君主から封建的要素が転化したところの近代的な官僚・政治家・軍人に移転したのにすぎないのではないか。政治の経済からの自立を無視するのは正しくないし，政治の独自な動きを重視するシュンペーターに同意できるが，君主の追放によって経済（ブルジョア）と政治（官僚・政治家・軍人）との同盟関係（いわゆるレーニンの金融寡頭制支配）が崩壊したとはいえない。つぎに，政治的に保守意識の強い独立自営生産者（農民・職人）の追放によって政治的支壁を破壊するとの見解は興味深い。しかし，根強く冷細経営が残存している現実を見ると，破壊してしまったと断定することはできない。

3．資本主義社会の制度的骨組の破壊

資本主義は，封建社会の制度的骨組を破壊したように，資本主義社会の骨組の土台をも切り崩す，とシュンペーターはいう。すなわち，産業集中は，分散傾向や相殺傾向によって速度を弱められるが，結局は，生産組織の合理化や流通費用の節約による利潤増加の誘惑が勝ち，産業集中が進行する，と

3）同上書，244頁

される。産業集中は競争の衰退を意味しないが，その政治的帰結が重大である。中小企業の所有者兼管理者は，家族・従者，縁者を支配し，投票を通して政治構造に量的な影響力を持っている。集中はこれらのブルジョア階級の下層を駆逐してしまうから，資本主義社会の政治構造が深刻な打撃を受ける。さらに株式会社の発達とともに，経営者（有給重役や有給支配人）は，被雇用者的態度をとり，自己の利益を会社や株主の利益から区別する，という。大株主は個人所有者の機能や心構えに及ばない。小株主は冷遇され，しばしば会社や資本主義秩序に無意識的に敵対的態度をとる。その結果，三つのグループはともに「私有財産」に特有な態度（貪欲さ）を示さなくなる，とシュンペーターはいう。さらに，契約は，個々人による無数の可能性間の選択によるものから，巨大企業と労働者や消費者の大群間の固定した・非個人的・非人格的・官僚化された契約に変化してしまった。かくて，

資本主義過程は，これらすべての制度，就中私有財産制度と契約の自由の制度，を背後におしやってしまう。しかもその制度こそ，真に「私的」な経済活動にとっての必須物と方法とを示すものであった。……資本主義過程は，工場の塀や機械を一片の株式に変えることによって，財産という概念からその生命を奪い去る。資本主義過程は，かつて極めて強力であった把握力を弛緩せしめる……。財産の物質的実体――とも称し得べきものがかくの如く霧消することは，ただ単にその所持者の態度に影響するのみならず，労働者や一般大衆の態度にも影響する。物質的実体を失い，機能を失いしかも不在的な所有等というものは，生き生きした財産形態がかってなしたようには人の心を揺り動かし，道徳的忠誠を喚起し得るものではない。真にそれを擁護せんとして立上るものは，遂に1人もなくなるであろう――大企業の領域の内外を問わず，1人もなくなるであろう[4]。

産業集中の予測については，すでに指摘したように，事実（現実）上の問題が残る。小株主が工場としての私有財産に無関心になってくるというのはその通りだが，大株主と経営者までが私有財産に貪欲でなくなってくるだろう

4）同上書，249頁

か。利潤を極大化しようとしない経営陣は株主総会で解任されるではないか。大株主が法人株主（機関株主）化してきているのが今日の特徴であるが，利潤の追求が個人所有者から巨大化した法人組織に移ったからといって，利潤原理すなわち私有財産制が形骸化してきたといえるだろうか。シュンペーターが指摘する契約の非個人化・非人格化・官僚化は事実と合致するし，そこから生まれる組織からの個の疎外なり，個の会社への帰属意識の低下は重視しなければならない。さらに，不在的所有がもたらす無感情化・道徳的不義いいかえれば腐朽的・退廃的傾向も，マルクスの窮乏化論や物象化・物神性論と交叉する。

4.　増大する敵対

以上みてきたように，ブルジョアジーの要塞は政治的に無防備となるが，それに応じて敵対的雰囲気が増大する，とシュンペーターは展開する。労働者に分配を保証することによって彼らから功利的信任状をブルジョアジーが獲得している，と考えるべきではない。シュンペーターはその根拠を次のように述べている。(1)功利的信任状は，結局のところ，超合理的な推進力や行為決定には勝てないし，(2)大衆は短期的視野を重んじ，長期的視野に立って資本主義の経済的成果・その将来について考えないし，(3)社会秩序に対する情緒的愛着がないことによって敵対的衝動に歯止めがきかず，(4)労働者の生活水準の上昇とりわけレジャーの増大は，逆に精神的不安状態を形成する，と。こうした敵対感を組織化し培養し言語化する集団が知識階級である，とシュンペーターは判断する。合理的思考の発展は資本主義の生誕より数千年も早いが，資本主義社会においては知識人に対する攻撃はブルジョア事業の私的要塞にぶつかってしまう。いいかえれば，集団としての知識人を擁護することによってブルジョアジーは自分自身を守り，自己の生活規範を守る。かくして，資本主義秩序は知識人を効果的に支配する意志も能力もない，とシュンペーターは結論する。

議論の自由は，階級批判や制度批判の自由を含む。それを制御できるのは非ブルジョア的政府だけである，とシュンペーターはいう。さらに現代で

は，大衆の生活水準の上昇とレジャーの増大とマス・メディアの飛躍的な発展によって，大衆が知識人の集団的パトロンの中に入り込んできた。高等教育の発達は，知識人の失業，不満足な雇用状態にある人，能力欠除者の高学歴化を生みだした。彼らは知識人群に入ってゆくから，その数は膨張し，その不満も累積化され，やがて社会批判へと向う。彼らの不満は，プロレタリアートの心情と共通するようになる，とシュンペーターはいう。知識階級は，労働運動を言語化し理論化しスローガン化させるばかりか，政治のゲームに影響を与え，官僚との間に密接な関係が形成されてくる。

このように，シュンペーターは，階級意識とそれの知識人による言語化・理論化の過程を見事に描き出している。とくに，知識人階級の役割は，知識人としての大学人に学生反乱が鋭く問いかけた生ま生ましい質問だった。まさに，学園闘争がサムエルソン教授にシュンペーターの予言を想い出させたわけである。

5. 解体

前項で説明されたところの環境から生じる敵対の増大，そこから生みだされる立法的・行政的・司法的諸措置に直面して，全ブルジョア階級はその機能を停止するだろう，とシュンペーターは結論する。そればかりでなく，資本主義の崩壊へと導くブルジョア内部の原因がある，という。第1に，株式会社の発達によって企業者たちの意志が，資本主義的動因（イノベーション）の活動範囲を狭めてしまう。第2に，資本主義的合理化は私生活にも影響を及ぼし，ブルジョアの家庭を崩壊させる。すなわち，親子関係から生ずる個人的犠牲（さまざまな家事労働・育児労働）を回避すべく，子供を生まない傾向がでてくるし，世帯が核家族化・アパート化してくる。そして，資本主義社会の上位階層において宏大な邸宅や別荘を単位とした親子関係・連帯が破壊されてくる。その結果，女房や子供たちのために働こう・利潤を極大化しよう・貯蓄し蓄積しよう，といった資本主義推進の倫理が喪失する，とシュンペーターはいう。さらに，ブルジョアジーは，しだいしだいに敵に教育され，敵の教義を受け入れはじめる。このことは，財政負担の賦課や労働立法

の導入に本気で抵抗しないことによって証明されている，という。こうした過程は，資本主義の崩壊というよりは社会主義への転形・移行というべきだとして，マルクスに接近してゆく。すなわち，

事物と精神とが益々社会主義的生活様式に従い易いように変形されて行くのである。資本主義構造を下から支えていたあらゆる支柱が消失すると共に，社会主義的計画の不可能性も消滅する。この二つの点においてマルクスのヴィジョンは正しかった。吾々の眼前に進行している特定の社会的転形と，その主動因としての経済過程とを結びつけることにおいては，吾々もマルクスに賛成することができる。……かくて資本主義の衰退はその成功に基くという主張とその失敗に基くという主張との間には，結局のところ一般に想像される程の相違は存しない[5]。

シュンペーターが判断するように，マルクスが，資本主義は失敗する，あるいは自動的に崩壊すると考えていたろうか。マルクスほど資本主義の成果を評価した人はいなかった，とさえいえるだろう。マルクスは，シュンペーターと同じく，創造的破壊（特別剰余価値をめぐる革新導入競争）によって資本主義は巨大な生産力を作りだし，それが社会主義の物質的基礎となると考えた。シュンペーターのマルクス評価は，マルクス以後のマルクス主義者の一グループが主張した自動崩壊論とオリジナルなマルクスとを同一視してしまっている。さて，シュンペーターの資本主義崩壊論から学び展開すべき点は，資本主義は政治的に不安定だとする見解とその分析である（サムエルソン教授のシュンペーター公理2）。マルクス主義の中で，経済の論理だけで資本主義の運命を判定しようとする傾向があるが（いわゆる経済決定主義），シュンペーターの資本主義解体論はこの傾向に対する一種の解毒剤的効果を発揮するし，マルクス再発見ともいえよう。ハーバード大学でのシュンペーターの晩年は「ビナイン・ネグレット」だったというが，サムエルソン教授が世界の経済学者たちを前にして再評価したシュンペーターは，資本主義と社会主義の将来についてマルクスと語りあえる地平に立った，といえよう。しかも，いまから40年以上も前の，第2次世界大戦中にである。

5）同上書，286頁

第3節　現代資本主義の危機の深化

現代資本主義は1950・60年代の高成長＝低失業に象徴される繁栄から，1970年代におけるスタグフレーションに集約される危機に転換した。第1節でみたように，サムエルソン教授の自画自讃から告白と忍耐への華麗なる変身が生じたのである。マルクスの対象とした資本主義は，その後100年以上も生き延び，大きく変貌した。現代資本主義をマルクス経済学では国家独占資本主義と規定する。『資本論』生誕以降，世界は2回の大不況（19世紀末大不況，1930年代の大不況）と2回の世界戦争に襲われた。そのたびに資本主義は，危機に対応してレッセ・フェール形態から新形態に変質してきた，といえる。すなわち，19世紀末大不況からの脱出過程を通って独占資本主義に移行した。国家独占資本主義は，第1次世界戦争期に萌芽的に形成され，1930年代の大不況期に移行期に入り，第2次世界戦争後に確立した，といえる。したがって国家独占資本主義は，大恐慌と世界戦争という資本主義の存立そのものが脅やかされる危機に直面した資本主義が，その危機に対応すべく国家を経済過程に介入させ，危機を管理し調整化していこうとする独占資本主義の新形態と規定できる。ケインズ理論とか混合経済論は，国家のスペンディング・ポリシーをマクロ経済学の手法で根拠づけたものにほかならない。ケインズ政策が失敗してきたことによって，1950・60年代の国家独占資本主義の成功は戦後の特殊な諸条件がもたらしたのであって，ケインズ政策が成功したのではない，との見解がある。しかしこうした見解では，現代資本主義が独占資本主義一般に解消されてしまい，国家独占資本主義の理論的規定・その展開過程・矛盾の発現を統一的に説明する道を閉ざしてしまうことになるだろう。

マルクス没後100年にあたる1983年3月14日，資本主義世界は世界的な長期不況状態に再び落ち込んでいた。前回の1973―75年恐慌も長期化した不況といってよいが，今回のはもっと深刻である。マルクス経済学者たちの1980年代の診断は，(1)長期波動の「下降局面」説，(2)資本の過剰蓄積にもとずく

長期不況説，(3)国家独占資本主義の自動調整機能の衰退・システムの硬直化に主原因を求めるスタグフレーションの長期化説，(4)戦後最長の不況説，に分類されるという[1]。私の見解は(3)のグループに入れられているが，(1)・(2)・(4)の要因を排除しているわけではない。本格的に国家独占資本主義やスタグフレーションを再論することは本稿ではできない[2]。ここでは，1980年代になって国家独占資本主義は危機を克服したわけではないばかりか，スタグフレーション病を深化させてしまったことを確認してゆこう。

私は，国家独占資本主義を，危機に対応して貨幣・労働力・恐慌を政策的に管理する体制と規定した。したがって国家独占資本主義の成功とは，国家の管理・調整化政策によって独占資本主義ひいては資本主義の内的諸矛盾の発現をある程度において制限することに成功していたことを意味する。その失敗なり，危機の深化とは，管理・調整化能力が衰退したり，ジレンマに落ち込んでいることにほかならない。以下，主要な管理・調整化能力について簡単に点検してみよう。

1.　景気調整能力

周知の如く，1970年代になって，停滞の長期化とインフレ加速化とのジレンマ（スタグフレーション）が発生した。1980年代の3年間は，サッチャー政権やレーガン政権に代表されるように，賃上げ抑制と石油価格上昇を抑えることを優先させたために，不況が世界的に長期化してしまった。それでも，インフレ抑制に成功したと評価する説には疑問が残る。そもそも物価が下落しないこと自体が問題なのである。さらに，世界的に景気回復の兆しがみえてきたが，それがインフレ加速化を再現させないと予想することはできない。景気調整能力はスタグフレーションによって著るしく低下した，といえる。

---

1)　伊木誠「当面する世界不況の性格」『経済評論』1983年7月号

2)　私の見解については，『現代資本主義の循環と恐慌』岩波書店，1981年，参照。私の見解に対していろいろな批判的コメントがだされているが，別稿でお答えする予定である。

2. 労働力管理能力

1980年代に進行した事態は，財政赤字の解消という口実の下に意識的に不況（停滞）政策をとって失業の脅威を労働者階級に押しつけてきたことにある。そして，失業率が急上昇し，賃上げ闘争が押えこまれた。しかし，労働者階級の購買力を低下させれば消費財購入が減少するのであり，それだけ不況を長期化させてしまった。賃金動向の二律背反性が見事に発現したといえる。しかも，大統領選挙を控えてレーガン大統領は「小さな政府」論を事実上は放棄してしまったように思える。さらに，失業の脅迫にもかかわらず，労働者の働く意欲の低下は簡単には回復しないように思われる。精神的貧困，疎外された労働は，資本主義そのものによって生みだされているのであって，シュンペーターの無気味な予言が現実性を増してきた。

3. 貨幣管理能力

IMF＝GATT 体制の事実上の崩壊以来，ユーロ・ダラー市場を中心として過剰な国際通貨ドルが累積され，投機目的に不安定な運動をくり返えしている。国際的な過剰流動性は，世界の貨幣・信用制度を極度に不安定にさせているばかりか，国内的な通貨管理能力を低下させる。当然このことによって通貨は膨張し，インフレーションが貨幣的側面から促進される。さらに，過剰なドルをユーロ市場から貿易赤字国も借り入れるようになったので，後進諸国や東欧の国々で債務が累積し，デフォルトの危険性が高まってしまった。国際的な金融恐慌の危険性が警告されるほどであり，貨幣を管理する国内的能力も国際的能力もともに低下してきたといえるだろう。

4. 戦争管理能力

今日の世界は，アメリカとソ連という両体制の超大国による核戦争の危険性に直面している。核の理性的コントロールが偶発的出来事や精神異常によって破壊される危険性さえある。しかも，1980年代に入って世界的な軍拡競争が生じた。すなわち，アメリカでは軍事費が3.7％（1980年），7.0％（1981年），10.2％（1982年），と急激に膨張したし，NATO では，3.3％（1980年），

4.3％（1981年），6.9％（1982年）とやはり急膨張している。ワルシャワ条約機構のほうも1.5％（1980年），1.7％（1981年），1.6％（1982年）と，軍事費が拡大してきたことには変りない[3]。こうした軍事支出は，生産手段の再生産外的消費であり，インフレ要因を強めるし，経済成長の潜在力を弱め，労働生産性の停滞をひきおこす。したがって，スタグフレーションを深化させる面がでてくる。しかも，アメリカ，ソ連，フランスを中心として，第三世界への武器輸出が急膨張してきた。ストックホルム国際平和研究所の年次報告によれば，第三世界の武器輸入は実質値で5年ごとにほぼ2倍のペースで増大している[4]。世界全体が危険な兵器の生産と拡散を抑制できないばかりか，むしろ際限なく兵器を増産し，世界中にそれをバラマイている。国家は戦争管理（抑止）能力を自からの手で放棄するような危機きわまりない軍拡競争の悪循環の中に入り込んでしまっている。

以上，簡単に1980年代になってからの国家の危機管理能力を点検してみたが，すべて1970年代よりも衰えてきたと判断できる。それだけ国家独占資本主義の危機が深まったことを意味する。

5.　スタグフレーションの深化

つぎに，1980年代のスタグフレーションを点検してみよう。景気調整能力のところで述べたように，1980年代の世界長期不況はインフレーションの加速化を回避しようとして発生したのであって，国家の調整政策がジレンマにあることにはかわりない。しかも約3年にも渡る長期不況にもかかわらず，消費者物価の上昇率は，サミット7カ国全体で，12.2％（1980年），10.0％（1981年），7.1％（1982年），であり，OECD 全体でも12.8％（1980年），10.5％（1981年），7.8％（1982年）となる。むしろ，インフレーションの抑制に失敗した，と判断すべきだろう。さらにスタグフレーション度（失業率＋消費者物価上昇率）でみれば，サミット7カ国では，1970年代の平均値12.4％から1980・81・82年の平均値16.4％と上昇している。OECD全体でも，1970年代の平

3）『日本経済新聞』昭和58年9月4日号
4）『日本経済新聞』昭和58年9月18日号

均値12.6%から17.2%へと上昇している[5]。スタグフレーションが1980年代の初期に深化したことはもはや明白である。

6. 経済学の危機

以上，簡単に点検してきたように，1980年代になって国家独占資本主義は危機を深化させた。それでは，社会主義への移行が現実化してきたのか。西欧において社会民主党系の政権が誕生した（フランス，スペイン，ギリシャ）。しかし，レーガン政権やサッチャー政権や中曾根政権にみられるように，保守化傾向も強い。まさに，保守と革新とが死闘を演じている観さえする。現存の社会主義諸国も，かつて抱かれたほどの魅力を失なってしまっている。危機が進行しているのに，有効な理論や政策が提示されていない。まさに経済学だけでなく社会科学そのものが停滞しているのではないか。それ以上に深刻なのは，現実感覚を失なってしまったのか，慎重になりすぎてしまったのか，社会科学者が危機について語らなくなってしまったことでなかろうか。シュンペーターが再評価されるのも，彼が，経済学はもとより，政治学・社会学・心理学等の成果を吸収して，資本主義の運命と社会主義の可能性，そして民主主義の将来を正面からとりあげたことにある。社会科学としての全体性・統一性が見失なわれ，細分化した個々の領域に没入し，全体的展望を持てなくなっていることに社会科学の停滞の一つの原因があろう。

経済学も例外ではない。むしろ危機といったほうが正確かもしれない。ケインズ経済学は，サムエルソン教授の告白に端的にあらわれているようにジレンマにある。ケインズ反革命として登場したマネタリズムは一つの経済学体系とはいえないだろうし，その政策的主張を実行したサッチャー政権やレーガン政権は，インフレ抑制には失敗したとみなしうるし，スタグフレーションが深化したことによって破産したといったほうがよい。しかし，マルクス経済学も例外ではない。国家独占資本主義の成功を十分に分析できなかったばかりか，国家独占資本主義の失敗を体系だてて分析できないでいる。私

5) 以上のデータは，OECD, *Economic Outlook* 33, July 1983, より作成

も含めて，1970年代のスタグフレーションを予想できなかった。マルクスの体系と理論にしがみついて，現実を解釈しようとしているにすぎない傾向が根強くある。現実の危機の進行とは切断された所で『資本論』解釈や新 MEGA の文献考証が展開されたりしている。大学での経済原論の講義は，1～2年かけて『資本論』の説明に費やされる。こんなことでは，保守化した学生がマルクスから離れてゆくのは当然だろう。誤解を招くといけないから付け加えておくが，『資本論』や新 MEGA を研究する意味がないのではない。『資本論』を講義する必要がないのではない。『資本論』そしてマルクスとエンゲルスの思想は，現代において，危機がまさに進行しているからこそ，絶大な重みを持ってきている，とさえいえる。問題なのは研究者兼教育者の方法態度や姿勢にこそある。現実感覚と壮大なるビジョンと強靱なる体系志向力が欠除している！　現代資本主義分析から出発してマルクスに回帰しようとした本稿の狙も，こうした方法態度や姿勢こそ必要だと判断したからである。我々自身が現実と格闘することによって，はじめてマルクスやエンゲルスの偉大さがわかるのではなかろうか。

第4節　マルクスと玄孫たちとの対話
——エピローグにかえて——

20世紀末の現代世界を目撃したら，ケインズ，シュンペーター，マルクスは何と言うだろうか。おそらくケインズは，現代資本主義のスタグフレーション病に眉をひそめ，弟子たちの失敗に失望するだろう。シュンペーターは，敵対的雰囲気の増大と精神的機能障害との予言が不幸にして的中してきたと感じるだろう。マルクスは，資本主義が100年以上も生き延びてきたことに驚くとともに，自分たちの思想を国是とする国々の社会主義に失望するだろう。そして，自分たちが未完成のままに残した遺稿がぞくぞくと世にでてくる（新MEGA）のをどう感じているだろうか。

マルクス　「未完成なのだから世に出すことをやめてくれといいたいとこ

ろだ。曾孫か玄孫の世代がもっと完成したものを世に出してほしいものだが。」

エンゲルス　「いや僕らの残した遺稿はもはや僕らの私有財産ではなくなり，人類共通の遺産になったのだヨ。」

マルクス　「そうかなあ。では，100年後に生きてるやしゃじいちゃん（おじいちゃんのおじいちゃん）の玄孫たちに注意しておくよ。あなたたちは，やしゃじいちゃんたちの書き残したものを鵜呑してはいけないヨ。やしゃじいちゃんたちと違った時代と場所で生活しているのだから……。ありあまるネタにまどわされず，モノゴトのマコトに徹するよう心がけ，あなたたちに残した弁証法という武器を使い研きあげなさい。そしてなによりも，この武器で世紀末の世界に斬りこむことが大切だヨ。そうしないと，武器そのものが錆びてしまうから。あなたたちのお父さんたちは，やしゃじいちゃんを語ることによって大学でメシを飯っていけるせいか，現実の世界や日本の分析を怠けてきてしまった。やしゃじいちゃんも大学の先生になろうとしたが，弁証法を使ってクニを批判したため大学に残れなかった。でも，そのほうがよかった。100年後に，民主主義がこんなに強くなって，大学で資本主義を批判する自由もある程度保障されるなどとは予想できなかった。でも，人間は自由になるとダメになることもあるから，お父さんたちのようになってはいけないと心がけて，自由と民主を育てていかなければいかんヨ。」

1.　弁証法を研きあげなさい

太　郎　「やしゃじいちゃんたちの弁証法でこの世のできごとを見ると，どんな風になるの？」

マルクス「あなたたちの住む日本国に『平家物語』があるのを知ってるでしょう。その巻一《祇園精舎》の一節が好きだヨ――祇園精舎の鐘の声，諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色，盛者必衰の理をあらはす。おごれる人も久しからず，ただ春の夜の夢のごとし。たけき者もつひには滅びぬ，ひとへに風の前の塵に同じ――諸行無常というように，この世はたえず変化して

ゆく，とみる。やしゃじいちゃんはキリスト教の影響を受けて育ったせいか，キリスト教批判をやったけど，東洋の仏教にこうした思想があるとは気がつかなかった。宗教そのもの，神に頼るのは大嫌いだけど……。」

花　子　「やしゃじいちゃんたちの使った弁証法は，どの本を読んだらわかるの？」

マルクス　「やしゃじいちゃんは，公式とか法則とかをそのまま鵜呑して，世の中のできごとにそのままあてはめようとするのは大嫌だ。あなたたちのヒイおばあちゃんたちに語ったように，まさに万物を疑ってかかれ，というのがやしゃじいちゃんのモットーだった。エンゲルスやしゃじいちゃんは，弁証法について書いたけれど，あれは長い長いヒトの歴史と自然について語っているのであって，資本主義そのものを知るにはそんなに役立たないと思うヨ。やしゃじいちゃんたちの弁証法にもとずくこの世のみかたのことを，みんなのおじいちゃんやそのお父さんたちは唯物史観と命名したけど，それは，あくまでもいまの社会（近代市民社会）の土台をあきらかにしようとしたときの信念だったにすぎない。この世は，経済だけでなく，政治，社会，心理，軍事などが複雑にからみ合っていて，それらが生き生きとしたしかもおかしなことだらけの動き方をする。やしゃじいちゃんは，この社会の構造と運動をけっきょくきめているのは経済活動とそこでの人と人とのまじわり（生産関係）であることを発見したから，政治経済学のマコトに徹した勉強に没頭したのだヨ。だから花子ちゃんの質問に答えれば，資本についての物語（『資本論』）そのものを読むことをお勧めします。ロシア革命の父に祭りあげられているレーニン君が，いみじくも『資本論』は弁証法の体系だといったらしいが，そのとおりだネ。もちろん，カテゴリーの自己展開として『資本論』を解釈する人もいるらしいが，そうではなく，モノゴトのモトをみつけだしてゆくこと（下向）と，モトからはじめてモノゴと全体をマトメルこと（上向）とがミックスした体系とみたほうがいいヨ。とにかく，やしゃじいちゃんは弁証法そのものについて書物にまとめなかったけど，弁証法を経済の分析にあてはめた成果が資本についての物語（『資本論』）にほかならない。弁証法の書物を読むよりも，資本についての物語（『資本論』）そのものを

読んでみて，やしゃじいちゃんの方法を身につけていかなきゃならんヨ。」

2. 社会体制の比較をしてくれ

次　郎　「お父さんから聞いた話によると，シュンペーターという大学の先生は，やしゃじいちゃんと違ったやりかたで，いまの世の中が社会主義に移ってゆくと予言したらしいネ。やしゃじいちゃんとどこが違うの？」

マルクス　「やしゃじいちゃんのことを，経済がすべてをきめると言った人だなどとレッテルをはる人たちがいるらしいが，そんなことを言う人は，ほんとにやしゃじいちゃんたちの書物を読んだのだろうか？あなたたちのお父さん，おじいちゃん，そのお父さんたちの中に私の遺言をそのように受けとめた人たちがいたけど，そういう子供たちには落第点をつけないといけないナ。やしゃじいちゃんの『フランスにおける階級闘争』とか『フランスにおける内乱』などの書物を読んでくれればわかるけど，やしゃじいちゃんは，経済・政治・社会・心理・軍事などの一体となった階級闘争そのものに生涯関心を払い，それに協力しようとしたのだヨ。あなたたちは，旗を振ったりデモに参加することだけが立派な世の中を作る活動だなどと思ってはいけないヨ。モノゴトのマコトに徹すること（科学）は，世の中をかえてゆく力であり，信長とか秀吉とか家康が作った社会（封建制社会）をコワシタ人たちの作った社会（近代市民社会）のホンネをあかるみにだすことが，モノゴトを考える人（知識人）が働く人たち（プロレタリアート）にしてあげられることなのヨ。モノゴトのマコトに徹しようとするイシ（科学）がキモチ（イデオロギー）にマケてしまってはいけない。やしゃじいちゃんの考えを実行するといって，おおくのナカマをはずし，のけものにし，コロシてきた歴史を断じて許せない。死んでいったひとたちに深くわびなければいけないと思っている。やしゃじいちゃんの百回忌をやってくれるのもアリガタイけど，やしゃじいちゃんの考えを支持して世直し運動のために死んでいったタダの人々や，世直し運動の名のもとにダマサレたタダの人々のほうにも線香たてるように，お父さんやお母さんに伝えておいてほしい。さて，次郎ちゃんの聞きたいシ

ュンペーターという人との違いだがネ，やしゃじいちゃんは，経済という仕事と政治という仕事を切りはなしては考えない。勉強してゆくとき，二つの仕事をいっしょにやったうえで，むすびつけなきゃいかん。クニのクチバシ入れがいやに大きくなった戦後の世の中をみると，やしゃじいちゃんのやりかたをもっとみなおさないといけない。この点も，お父さんやお母さんに伝えておくれ。それに，シュンペーターという人は，経済の仕事はもともとうまくやれると考えているらしいが，この世の経済の仕事はヨクないことをため込んでいってしまい，そしてゲンコツによってはきださせなければ健康を維持できないのだヨ。だから，経済的にも安心できないシクミ（体制）だとみなしたのヨ。でも，『資本主義・社会主義・民主主義』という書物はおもしろい。なによりも，いまの世の中のことがまじめに語られているし，やしゃじいちゃんが強調してやまなかったシクミ（体制）という考え方を生きかえらせているし，やしゃじいちゃんが見ることのできなかった社会主義とくらべている。あなたたちは，西（資本主義）と東（社会主義）とう視角のほかに，食べていけないで死んでゆく人々もいる南の世界も入れてみないとダメ。東の新しい世の中を作ろうとしてきた歴史と，南の人たちの国づくりを知っているのだから，やしゃじいちゃんたちの夢みた世界がどれだけできているかについて調べてみてほしい。そして，もしやしゃじいちゃんたちの夢がまちがっていたら，どんどんなおしてくれていいし，すててしまったっていいヨ。そうしてくれてこそ安心して，皆のイェニーやしゃばあちゃんのところに戻ってゆける。100回忌とは，そういうことをやってくれるのかと思ったら，そうでもないネ。やしゃじいちゃんについていろいろしゃべるのは勝手だけど，いまの世の中をどうみたらよいか，とか，どう変えていったらよいか，というみかたからやしゃじいちゃんを知ろうとする作文が少なすぎるのにはガッカリしている。もっとなまなましい気持で，やしゃじいちゃんをけなし，いいところをひきついでくれないと困るネ。」

3．壮大なる未完成の体系として受けとめてくれ

春　子　「やしゃじいちゃんがいま話した東と西と南の社会のありかたをくらべるには，どうしたらできるのかしら？」

マルクス　「ウン，大切なだけにむずかしいネ。やしゃじいちゃんは経済学を勉強してゆくとき，いろんなプランを作ってみた。ちょうど皆が夏休みをどう過すかについて考えるようにネ。それはまとめると，(1)資本，(2)土地所有，(3)賃労働，(4)国家，(5)外国貿易，(6)世界市場，となる。お父さんやお母さんたちは，資本についての物語（『資本論』）がこのプランのどこまでをとりあげているかについて，しゃべりあっているから，詳しくは家に帰ってから聞いてみるといいヨ。やしゃじいちゃんがさまざまに解釈されるのはしかたがないけど，あなたがたに是非とも心に入れておいてほしいことは，書き残したものは，資本についての物語（『資本論』）を含めてすべて未完の体系である点だヨ。積木遊びと違って，個々の断片を寄せ集めたからといって体系ができあがるものではない。できあがっていないからこそネウチがあるので，できあがった宝物のように思って玉手箱を開けたら，あなたたち自身が老いぼれてしまうノネ。ないものネダリをするとイェンニーやしゃおばあちゃんに叱られるヨ。でも，やしゃじいちゃんの資本からはじめて世界市場にまでゆこうとした姿整それそのものは生かしてほしい。ヒルファディング君やレーニン君は，それを20世紀初頭に具体化しようと試みてくれたが，あなたたちは，それを20世紀末において試みてほしい。プランのあとのほうは，資本主義とは違った要素が入り込むし，ましていまでは，社会主義といった新しいシクミ（体制）がある。だから，資本についての物語（『資本論』）で使った弁証法は，そのままでは使えないだろうナ。いまの資本主義，いまの社会主義，いまの世界を考えてほしいが，それら全体をまとめることも考えてほしい。そうでなければ，いまの世界をその全体において知ったことにならないし，世直し運動に役立たないヨ。

玄孫たち　「ハイ。家に帰えったら，伝えるヨ。僕たちにはあまり先のことはヨク見えないけど，100年前と比較してみれば，働く人たちのありさま

は改善されたし，民主主義とかいうのも育ってきたといえるヨ。」

マルクス　「そうであれば，当時のイギリスの働く人々のありさまを詳しく紹介したカイがあったといえるものだ。でも，南でのモノのまずしさ，西での心のまずしさ，東での自由のまずしさには困ったもんだ。とくに，ヒロシマ・ナガサキ・ビキニへの危険きわまりない競争に突っ走っている政治ヤと軍事ヤのバカドモには激しい怒りを持っている。この丸い地球そのものを破壊しては絶対にいけない。今日は，資本についての物語（『資本論』）のいまにおけるネウチ，この物語といまの世の中とを結びつける仕事，いまの社会主義のヨクナイところ，などについて話せなかったのは残念だ。来年の3月14日にまた会うときまでに，やしゃじいちゃんたちも考えておくからネ。」

玄孫たち　「バイ・バイ，イェニーやしゃおばあちゃんにもよろしく……。」

（1983．10．19，脱稿）